

トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜 (5)

出 羽 尚

(第51号よりつづく)

5. 詩を生み出す庭

先述の通り、トムソンは恋人エリザベス・ヤングへ宛てた1743年8月の手紙で、訪れたばかりのハグリー・パークの自然を称え[注164参照]、また、1744年の改訂時に加えられた『四季』の詩行では、その庭が哲学的瞑想の場であると歌った。この庭の訪問直前にも、トムソンは庭を所有するリトルトン卿に手紙を書いており、ちょうど庭を訪れる頃には、心地よく詩的で落ち着いた楽しみを得られる季節になっているだろうと言う。

ハグリーは私がイングランドでもとりわけ見たい場所です。想像するに、庭自体が大変に心地よいことは言わずもがな、仲間の活気があれば、心地よさは最高潮に達するでしょう。[中略]訪問は秋になるでしょうから、私もますますその庭が気に入ることでしょう。というのも、思うのですが、秋の季節は一年で最も人の心を喜ばせ、最も詩的だからです。秋は、春の華やかさや夏のざらつく光で気分が放蕩することもなく、穏やかに落ち着いた喜びで心和らぎます。¹⁶⁶

季節の移ろいがもたらす自然の刺激が、詩人の感性を揺り動かしてくれるだろうとの期待が溢れ出る。続けて、ハグリーの詩神が心の平穏と調和をもたらしてくれることを期待し、こう書く。

私が詩神を連れてくると仰って下さいますが、詩神は貴所で目にできるでしょう。そう、リッチモンド・ヒルにいる小さな貴婦人の如き詩神ではなく、素晴らしい素朴な田舎の詩神です。私は、喧々たる騒々しさのなか、遠く離れたこの街の騒音のもとで長く生活してきたせいで、真の隠遁がどのようなものなのか忘れかけております。あなたと

共に最高に優雅で、純粹に素朴な隠遁を楽しみましょう。心が落ち着き平穏になるだけでなく、活気を与えられ調和へと至ることになるでしょう。

¹⁶⁷

テムズの詩神が住まうリッチモンドに隠遁したトムソンであったが、街の気取った詩神は、ハグリーの自然な詩神とは比較にならないと考えたのだろう。リトルトン卿に対する諂いを差し引く必要はあるかも知れないが、素朴な自然の詩神がいる庭での隠遁は詩人の喜びであり、なるほど、トムソンが「春」で歌うように、この庭で瞑想するリトルトンは庭の詩神に刺激され、自らも詩作に励む。

ふと目を転ずれば、これら厳粛な思いが／詩神を呼び起こし、厳正なる審美眼で、／古の歌の啓発的文句を味わううちに、／負けじと、自らも筆を執る。(932-35行)

それでもハグリー・パークとて、改善の余地はあった。ハグリーの改良に関するトムソンの言及が、1746年にリトルトン卿の弟ウィリアム・リトルトンと共にリーソーズ庭園を訪問した際の様子を記録した、シェンストンの記述に残る。

トムソンは私の門の向こうにある小さな流れを見て、彼[リトルトン卿]も小川を利用したら良いのにと示唆した。[中略]ハグリーにこの小川があれば価値があろうに！¹⁶⁸

リーソーズ庭園を歩きながら、庭の詩的な連想について所有者のシェンストンやウィリアム・リトルトンと語るトムソンが、水の流れの詩的連想を示唆した場面である。確かに、ハグリー・パークにも「心和ませるような水音をたてる、／小川のせせらぎ」

があり、そこでの哲学的瞑想により、「真理」や「博愛の精神」に溢れ、豊かな「芸術」のある「美しい神秘の光景」が立ち現れる¹⁶⁹。それでも、自らをして「私はまさに真に庭を愛するものである」¹⁷⁰と認めるトムソンにとって、庭の詩神を呼び起こすより相応しい環境が常に意識されたのだろう。それだけ庭は重要な詩作の源であったのだ。

著述家トマス・ウェイトリは、『現代庭園についての所見』の初版を1770年に出版しているが、ここにはハグリー・パークに建てられたトムソンの碑について言及されている。

トムソンを記念した八角形の碑は、彼のお気に入りの地点に建ち、傾斜の頂上に位置している。草地が下の谷間に沿って続き、四方の木々の向こうに消えていく。¹⁷¹

このトムソンの碑は現存しないが、1801年7月の『ジェントルマンズ・マガジン』が引用した、碑に彫られたラテン語のテキストを読むと、この碑がトムソンの死後にリトルトン卿によって設置されたことが分かる¹⁷²。碑から見たハグリー・パークの様子は、ウェイトリの『所見』の1802年版の挿絵に確認できる〔図64〕。ステイププルと思われる技法の挿絵には、前景の両脇に風景の枠となる背の高い樹木が配置され、中景には広がりのある芝地、そして後景中央にはハグリーの位置する「豊かで美しい田園」¹⁷³を囲むクレントの丘、そして左手にはフォリーの廃墟ハグリー城が見える。このクロード・ロラン風の景観は、トムソンが「春」でハグリー・パークを描写した以下の詩行を連想させる。



図64 ウレット下絵、ル・クール版刻《トムソンの碑から見たハグリー・パークの眺め》1801年出版、技法不明、紙

やがて、君は高台に登り、そこに立つと、／突如として視界が大きく開けて来る。／丘や谷、森林や芝地、青々とした草原や、／黒々とした荒れ野、木々にすっぽり／包まれた村落、灰り家の煙が／立ち昇る、尖塔だらけの町々など、／君の眼はあっちこっちと馳せ巡る。(950-56行)

トムソンの友人ジョゼフ・ウォートン〔注138参照〕も、ハグリーやリースーズの風景式庭園を「優れた詩の実践例」¹⁷⁴とした上で、『怠惰の城』の詩行（第一章38連）を引用しながら、庭園と理想的風景画のアナロジーについて述べている。

実際のところ、件の二つの技芸〔庭園と絵画〕が異なるのは、用いる材料の点においてのみである。そして、〔ランスロット・〕ブラウン氏を偉大な画家と呼ぶことは、決して誇張しているのでも、気取っているのでもない。というのも、彼は「柔らかな色彩でロランが軽やかな筆で描いたものや、ローザが荒々しく塗ったものや、博学なプッサンが描写したものをなんでも」実現しているからである。¹⁷⁵

ウォートンがここで示すのは、庭園が詩の具体的な実践の形であること、そして、庭園が理想的風景画と同様の詩的連想を備えていることである。当然トムソンも絵画、庭園、詩という三つの芸術の関係を理解し¹⁷⁶、『自由』の詩行では、整形式庭園を批判した後〔注161参照〕、自由を再び獲得した自然な庭（＝ブリテン）では、複数の技芸が連関して成果を生むと歌う。

ほらごらん、再び汝の技芸の姉妹たちが、／汝の美神たちの手を取って、仲良く踊らせているのを。／大切な美神に生まれた姉妹たちは、弱った国家において／自分たちの作を手にするべく、高尚なものへと覚醒させる、／生き生きとした天才を、自由な思考を。／尊大な君主や夢現の僧の／大仰な方法は最早なく、彼らに囚われる者もなし。

〔中略〕

見よ、森の精のいる情景を。そこでは専ら技芸が主張して、／森の女王に衣装を着せ、その魅力を明らかにする。／ポウプの小規模な庭が示すよう

に、／バサースト卿の庭が広大な森全体に広がっているように、／そして、リッチモンド、チジック、ストウの庭が形を成すように。(第五部 683-700 行)
177

自然で開かれた庭が詩作を促してくれる場であることは、トムソンがリッチモンドの自庭について触れた手紙にも確認できる。

そして、現在、まさにこの瞬間、魅惑的な時がやってきました。神が大地に緑のガウンを与えようとしているのです。いやむしろ今まさに与えているところと言っていいでしょう。小夜啼鳥の声が私の住む通りに聞こえます。聞いてください、貴君の庭と同程度の範囲にまで、私の田舎の所有地を拡張しました。私の隣には草地在り二つあり、うち一つと元々うちの庭だった辺りとの境を壁、もとい柵で囲っていましたので、垣根のそばを歩道が通る形になっています。日中いつも、また時に夜でも、私がそこを歩いている姿を想像してみてください。私も貴君のことを想像しているのですよ。杉やヤシの木の下で横になるところを、また、北のどんよりとした気候ではありえないような素晴らしいまどろみを楽しんでいるところを。厳かな静けさと焼け付く正午の激しい熱気が生む神々しく聖なるまどろみです。またある時には、貴君が、ライムやオレンジの木立のなかでポンチ酒を飲んでいるところ、まるでブラックベリーを摘むかのように普通にパイナップルを生垣から収穫するところ、背の高い月桂樹の下で詩を作るところ、そして、見事に咲き誇るギンバイカの下で愛し合うところを想像しています。¹⁷⁸

庭の自然が引き起こすまどろみは、決して無気力な怠惰に陥るものではなく、詩作を促す。リッチモンドの彼の庭は、風景式庭園のような大規模なものではもちろんない。それでも、トムソンは自らの庭を外に拡大し、その庭では自然の魅力に快を得ることができ、詩作もできる。庭の境界には生垣があるとはいえ、間違っても壁で囲われることはない。開かれた庭を自由に散策したり、また安寧に心身を委ねたりすることで、想像力が刺激され、その成果が詩という創造として公に供される。トムソンに

とって、庭は詩作の場であり詩の源泉に他ならない。

6. トムソンのパルナッソス

庭園が詩の源泉であるとすれば、庭園とのアナロジーが見いだせる怠惰の城も、詩作の場として、また、詩の源泉として理解できる。怠惰の城が詩的想像力の源泉であるとの先行研究の指摘は¹⁷⁹、庭園との連関において改めて確認できるのである。

もしも詩人がこの城に入り黙想を重ねれば、公共に資する詩を作ることができるはずだ。ところが、この城にいたトムソン自身をモデルとした「太った詩人」は、勤勉に詩作を重ねることができず、怠けていた。

ここにはまた、詩人らしからず太った詩人が住んでいた。／嫉妬心、腹黒さ、私利私欲など全く無縁な、彼は／常に心の清らかさなど、自然の好ましいテーマについて／思わず口から湧いて出る調べを滔々と歌いまくり、／俗世間に、愛想をつかし、おさらばしたのであった。／ここでは安楽椅子に横たわり、呑気に笑い転げたり、／楽しい仲間に囲まれて、大酒を食らってばかりいたのだ。／本来は道を説く聖人君子で、色恋ざたの歌など／書くのは大嫌いであり、吟誦するなどもっての外だった。(第一章 68 節)¹⁸⁰

どうやら、詩人とは太っていないものだったらしい。この点については、トムソンがジョージ・ドデントンに宛てた 1730 年 10 月の手紙で、ある医者からの言葉に触れた部分に記されている。

バースのあるとても太った医者が私に言いました。その才をより動かすために、詩人は貧しくあるべきだと。これは、鳥がより甘美に歌えるようにと両目を削り抜く、あの残酷な習慣と同じです。しかし、確かに鳥たちは、春爛漫の華やぎのなかでも、緑豊かな森の中で最高に甘美に歌います。¹⁸¹

バースの医師とはジョージ・チェイニーを指し、彼は 32 ストーン (約 200 キログラム) もの体重があったという¹⁸²。チェイニーによれば、詩人は貧しい方がよい。春の華やいだ誘惑に眼もくれず美しく歌う鳥のように、余計な快や富を与えない方が、詩人の天才を洗練させるからだ。そして、そのように質素

に暮らせば、当然、太らない。詩の才を発揮し、美しく歌う質素な詩人は太らないのだ。

城の詩人（＝トムソン）も本来は太っていなかったのだろう。なぜなら、もともと彼は「道を説く聖人君子」として詩を理解し、「自然の好ましいテーマ」を扱う詩人だったからだ。無欲のこの詩人は、詩作を妨げる俗世間から隠遁するためにこの城に来たはずだった。しかし、この城の自然や技芸が想像力の快を刺激する前に、彼は放縦の快に囚われ怠慢に陥ってしまった。この姿は、本来は詩才を備え、1736年にロンドン郊外のリッチモンドに隠遁したにも関わらず、そこで勤勉に黙想に励むことなく怠慢に陥ってしまった自身の様が重ねられている。

実際、怠慢なトムソンは太っていたようだ。ジョンソンは『英国詩人伝』において、『怠惰の城』の詩行を引用し、トムソンの容姿に触れている。

トムソンは比較的背丈があり、詩人らしくならず太っていた。顔つきは凡庸で、外見もあか抜けず、活気がなく、魅力に乏しかった。大勢のなかでは寡黙でも、親しい友人と一緒にだと陽気で、友人たちからは心から愛されていた。¹⁸³

年代ごとにトムソンの肖像を見たときに気付く容姿の変化は、加齢だけが原因ではなかったのかも知れない。ジョン・ヴァンデバンクが描いた20代のトムソン〔図65〕と比べると、『怠惰の城』を書き始め、己の怠惰を自覚していた頃の彼を描いたスティーヴン・スローターによる1736年の肖像〔図66〕は、見るからに恰幅が良い。あるいは、これとてかなり美化された詩人の姿であったのかも知れない¹⁸⁴。

既に引用した通り、計画途上の『怠惰の城』を題材に、トムソンがこの創作を通じて怠惰を克服することを詠んだトマス・モレルの1742年の詩があった〔注16参照〕。

だからこそ、学問と機知の神が／憐みの目で汝を神の最愛の子と認めますように。／汝の太ったわき腹から、ああ、汝を悲しませる／眠気を誘う歌を振り落としてくれますように。

ここには、太った詩人が学問と機知の神の力で怠慢から目覚め、『怠惰の城』の完成を持って再び詩の



図65 ジョン・ヴァンデバンク《ジェームズ・トムソン》1726年、油彩、画布、エディンバラ、スコットランド国立美術館群 [PG642]



図66 スティーヴン・スローター《ジェームズ・トムソン》1736年、油彩、画布、ニューヘイヴン、イェール大学英国美術センター [B1981.25.573FR]

才を発揮せんことが期待されている。

トムソンは第二章の冒頭4節を使って、己の怠惰を再び戒め、自らを「数少ない天才の情熱を煽りたてるべく生まれたのだ」（第二章4節）と、再び詩作に励む決意をして、第二章を書き始める。城の中にいる太った詩人の才が発揮されることを期待すると同時に、怠惰の城が準える現代のブリテンに住む自身の詩神が再び目を覚ますことを決意する。というのも、トムソンが嘆くように、ブリテンには詩の神がいなくなってしまったからだ。

私を後援し、不毛な、我がパルナッソスを／保護してくれる、パトロンはいないのか。（第二章2節）

詩神アポローンが住むはずの我がパルナッソス

(=ブリテン)は、残念ながら、詩や芸術に関して不毛の地となってしまった¹⁸⁵。しかし、この島には怠惰の城と同様に、詩の源泉となる自然がある。詩才を備えた者であれば、たとえ邪魔する者があるとしても、己の徳と想像力が惑うことはない。トムソンは続ける。

運命よ、汝がそっぽ向こうと一向平気だ。／寛容なる自然の恵みを私から奪う事はできず、／[中略]／暮れ方、森や草原の中、涼々たる川の辺を、／飽かず散策する私の足を引き止める事はできない。／この身が健康ならば、体力気力が益々充実し、／俗人共に虚仮にされても、痛くも痒くもない。／何があれ私の理性、徳性、想像力は揺るぎはしない。(第二章3節)

城の中で大いに徳を積んだ「まこと美德の申し子」(第一章66節)と同じように、太った詩人も本来の詩才を発揮して黙想を積み、惑うことなく、公共に資する詩を生み出せる。怠惰の城(=『怠惰の城』の創作)は詩人(=トムソン)に才を発揮させる機会を与え、その才能が城の外に供されれば(=作品が出版されれば)、再びブリテン全体も詩神が住まうバルナッソスとなる。かつて、ブリテンに渡った勤勉の騎士は、「アポローンが豎琴を奏でたくなる程の詩歌」(第二章13節)を作り、田舎で隠遁生活を送っていた(第二章24-25節)。また、東方より文芸の女神たちを呼び寄せたとき、彼はバルナッソス山の山腹に位置する霊地カスターアをブリテンに見出し、結果、「有名な文士」や「田園の歌人たち」が育まれていた(第二章21節)。こうしたバルナッソスを再びブリテンに取り戻すには、勤勉の騎士が精神の勤勉によって徳を積んだように、詩人の精励が不可欠であり、怠惰の城は、そのための詩作の源泉となるのである。

トムソンにとっては『怠惰の城』の創作が詩才を発揮する機会となり、詩人としての自らの大義、すなわち公共の徳[注142参照]をなすことに繋がった。「理性、徳性、想像力は揺る」(第二章3節)がなかった彼は、惑うことなく想像力を発揮したのである。『怠惰の城』の創作がトムソンに詩作の場を提供し、怠惰に陥った彼の詩才を再び発現させることで、ブリテンにバルナッソスを取り戻したのであ

る。

おわりに一開かれたトムソンの怠惰

以上、トムソンが『怠惰の城』で取り上げた怠惰の複数の意味を辿ってきた。『怠惰の城』における怠惰は、勤勉の美德が駆逐すべき悪徳であると同時に、公德につながる創造の源泉としても捉えることができた。勤勉の騎士が勤勉の擬人像として描かれるのに対して、怠惰が明確な姿を持って描かれないのは、トムソンの怠惰がこうした複数の意味を持つ故であろう¹⁸⁶。

マキロップの指摘する通り[注26参照]、トムソンの怠惰は第一に、伝統的な勤勉の美德と対比される怠けた悪徳であった。トムソンが『自由』において、ブリテンの美德である社会的紐帯を崩壊させるものとして批判した諷刺や豪奢がそうであったように、この悪徳としての怠惰は、あらゆる美德が結びついた公德によって防ぐことができる。18世紀、勤勉の美德は、有閑貴族の墮落を批判するための、また、労働者が働かずに破滅に陥って暴動を起こさせないための、つまり、社会を安定させるための基本的な考え方だった¹⁸⁷。個人や社会を崩壊させる怠惰を避け、政治、農業、文芸と言った様々な領域において国家の繁栄を支える礎となる勤勉を維持すべし。この教訓に従うことで、ブリテンの繁栄は保証されるのだ。農耕詩の伝統が息づく18世紀前半、勤勉の美德を説く教訓詩としての側面が『怠惰の城』の重要な部分であったことは間違いない。

第二に、トムソンの怠惰は、想像力を働かせる夢想を意味し、そして第三に、隠遁状態であった。この二つの怠惰に関してとりわけ重要だったのは、トムソンが怠惰の城を隠遁の場として城外の空間と区別する一方で、黙想の成果は城内に留まることなく、想像力や公德となって開かれた公共に発揮されることが期待されていたことにある。つまり、夢想は単純な快楽なのではなく、夢想によって陶冶した精神が城の外に発揮されることによって、社会の様々な領域が改良される。詩人も同様に黙想の成果を社会に供することが重要で、城での夢想から想像力を発露させ、詩作という形の公德を生むことが、詩人の大義であった¹⁸⁸。

このように、想像力の発露を促す快と詩的連想を備えた場として怠惰の城は捉えられる。そして18

世紀後半以降、『怠惰の城』は、とりわけこの点において評価された。ウィリアム・クーパー、サミュエル・テイラー・コールリッジ、ウィリアム・ワーズワスといったロマン派の詩人たちは怠惰の創造的側面を積極的に取り上げ¹⁸⁹、怠惰が個人の徳を醸成するだけにとどまらず、社会的な紐帯を生み出すことにつながるものと見なした¹⁹⁰。

最後に、トムソンの想像的な怠惰がロマン派に引き継がれた様を、ジョン・キーツの詩行と、同時代の画家の作品に見てみたい。キーツは思考に満たされた「心地よい勤勉な怠惰」¹⁹¹を、知的な成熟あるいは自我の獲得へと至る過程として位置付け、こうした怠惰を「唯一の幸福」¹⁹²と書いた。そしてこの幸せな怠惰を、トムソンから引き継いでいることをキーツは自覚している。

今朝の僕は怠惰で最高に気楽な心持ちだ。私はトムソンの『怠惰の城』の詩行の1、2連に思い焦がれている。¹⁹³

キーツは怠惰をより高次の状態へつながる思索の段階と見なし、「この思索の旅はなんと楽しいものでしょう」¹⁹⁴と怠惰に楽しみを見出す。この楽しい怠惰を歌った「怠惰に寄せるオード」では、気楽で楽しい怠惰に比べて、詩作そのものは苦しみを伴う行為として捉えられている。

詩がなんだ！そう、彼女には喜びがない。¹⁹⁵ [第4スタンザ]

喜びのない詩ではなく、その前段階の怠惰にこそ幸せがあり、キーツは怠惰な己の元から愛と野心とともに詩を去らせる¹⁹⁶。

だから君たち3人の霊たち、さようなら。[第6スタンザ]

『怠惰の城』から空想に満ちた怠惰を引き継いだキーツは、病に伏せる友人のために詠んだ詩で、怠惰の城のイメージをクロード・ロランの《魅惑の城》[図67]に見出していた[注37参照]。

ほら、魅惑の城を知っているでしょう。／湖畔の

岩の上に、木々に囲まれ／そびえ建つ城。[中略]ほら、良く知っているあの城、まるで／苔むした館の如く、マーリンの屋敷の如く、夢の如く。／ほら、きれいな湖に、小さな島々、／青い山々、そして、そばを流れる冷たい小川。／どれも他の場所では半分の生気もないのに、／ここでは愛憎入り混じって生き生きと、／微笑み、また顔をしかめ、巨大な脈打つ地下空間の上に／立ち上げられた丘のよう。¹⁹⁷

《魅惑の城》は、アプレイウスの『黄金の驢馬』におけるクピドとプシュケの物語を典拠とし、前景には、愛するクピドに棄てられたプシュケ（あるいはクピドに会う前とも指摘される）が、物思いに耽るメランコリーのポーズで描かれる¹⁹⁸。プシュケ（サイキ）はキーツが「サイキに寄せるオード」で取り上げた対象であるが、このオードも『怠惰の城』の影響が指摘され[注37参照]、「放念の心虚しく森林をさすらい」¹⁹⁹ゆく怠惰な境地を歌う。プシュケのための神殿を建てようと歌うキーツは、その神殿では「思念の枝ぶりが 快き苦痛をおびて新たに 拡がり／松に代り 風に戦ぎざわめく」ことによって、「陰翳深き思念のかちうる／心とむありとあらゆる喜び」に満たされるという²⁰⁰。快い思考の場として喜びが得られる点で、プシュケの神殿は怠惰の城と同じ意味を持つ。キーツには怠惰の城も、魅惑の城も、そしてプシュケの神殿も、いずれもが「心地よい勤勉な怠惰」な時間を過ごす場所であったのだ。

キーツが《魅惑の城》や『怠惰の城』に向けた視線は、おそらく19世紀の画家たちも共有してい



図67 クロード・ロラン《魅惑の城》1664年、油彩、画布、ロンドン、ナショナル・ギャラリー [NG6471]



図 68 クロード・ロラン《行列のあるデルフォイの風景》1673年、油彩、画布、シカゴ、シカゴ美術館 [1941.1020]



図 69 ジョン・マーティン《吟遊詩人》1817年発表、油彩、画布、ニューカッスル、ラング美術館 [TWCMS : C6976]



図 70 J.M.W. ターナー《怠惰の噴水》1834年発表、油彩、画布、フレデリクトン、ピーヴァーブルック美術館 [59.259]

た。既に確認したように、『怠惰の城』の挿絵版画は多くなく、作例の多い版は1840年代になるまで登場しない[注42参照]。しかし、1748年の初版から90年以上を経過して描かれた怠惰の城の様子を見ると、詩行の描写との関連を見出せる一方、魅惑的なその雰囲気[図9]は《魅惑の城》のそれを、鬱蒼とした木々に囲まれた山腹に位置するその威容[図27]は詩神アポロンの神殿を抱くパルナッソスのそれ[図68]を連想させる。峻険な山の斜面に聳える城の威容と詩的な雰囲気は、トマス・グレイの1757年の詩を題材としたジョン・マーティンの《吟遊詩人》[図69]²⁰¹とも共通する。ロマン派の詩人たちによる積極的評価により、怠惰の城は、怠惰な思索や詩的連想と関連付けられる深山幽谷に建つ城のイメージと結びついたのである。ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナーは、1834年のロイヤル・アカデミーの展覧会に、『怠惰の城』に着想を得た《怠惰の噴水》[図70]を出品しているが、怠惰の城の魅惑的で空想的な雰囲気は、この作品にも間違いなく認めることができる。

トムソンは1730年代から40年代にかけて、公徳を主題とした劇作を複数発表した²⁰²。これらの劇作は、ウェールズ王太子に献呈されたり、また、王太子から直接依頼されたりしたものもあり、この時期のトムソンは、『自由』や1744年に改訂された『四季』も含めて、とりわけ愛国的な姿勢で創作に励んでいた。その意味で、この時期の最後に発表された『怠惰の城』は、公徳こそが詩作の意義と考えたトムソンの集大成と見なすことができる。

自身の怠惰を扱った私的な作品を構想する所から始まったトムソンの詩であるが、詩作を通じた内的・個人的な思索を経て、詩的創造として続く詩人や画家の想像力を喚起することによって、外的・社会的な活動となったのである。「最も重要な教訓を伝える」[注4参照]ことに成功した『怠惰の城』は、ブリテンの文芸に資するべく、文字通り、外に開かれたのであった。

(了)

* 印は出羽 (2016)、# 印は出羽 (2018)、^ 印は出羽 (2021) それぞれの引用文献を参照。

¹⁶⁶*McKillop, ed. (1958), p.163.

- ¹⁶⁷ *McKillop, ed. (1958), p.163.
¹⁶⁸ *McKillop, ed. (1958), p.186.
¹⁶⁹ 『四季』「春」921-31 行。
¹⁷⁰ *McKillop, ed. (1958), p.195.
¹⁷¹ Whately (1770), p.197.
¹⁷² Urban (1801), p.593. このページの対面には、ハグリー城を描いた挿絵がある。
¹⁷³ Whately (1801), p.107.
¹⁷⁴ Warton (1782), II, p.186.
¹⁷⁵ Warton (1782), II, p.187.
¹⁷⁶ Chase (1943), p.114.
¹⁷⁷ *Thomson (1986), p.146.
¹⁷⁸ *McKillop, ed. (1958), p.195.
¹⁷⁹ Adelman (2014), pp.176-77.
¹⁸⁰ この節に付された原註に「この節の以下の詩行は著者の友人によって書かれた」とあり、最初の詩行を除き、リトルトン卿によって書かれたものである。以下参照。
 *Thomson (1986), p.388, n.lxxviii.
¹⁸¹ *McKillop, ed. (1958), p.73.
¹⁸² *McKillop, ed. (1958), p.75. チェイニーの著作とメランコリーについては、以下参照。^Moore (1953), pp.221-22.
¹⁸³ *Johnson (1781), IV, p.265.
¹⁸⁴ トムソンの肖像については、以下参照。*Sambrook (1991), pp.285-87.
¹⁸⁵ 1735年8月7日の手紙でも、トムソンは同年に最初の三部が出版された『自由』で、バルナツスを追求したことを述べる。「お送りする自由という名の詩の冒頭の三部をお読み頂ければ、なおも私が、不毛でも感じの良いバルナツス山を目指したことがお分かりでしょう。この詩には、私が旅行を通じて集めた知識、とりわけ古代の領域からの知識を注ぎ込みました。」以下参照。*McKillop, ed. (1958), p.95.
 パルナツスの失われたプリテンを嘆く第二章2節の詩行では、「高尚な芸術的切磋琢磨も法に守られず」と、詩人の活動が社会的に支えられていない点についても触れられるが、この点から、トムソンが詩人を奨励することの重要性を考えていたとストックデイル[注33参照]は指摘し、詩人にはペンとインクと紙だけ与えておけば良い、と述べたというホラス・ウォルポールとの違いを指摘している。以下参照。*Stockdale (1807), II, pp.128-29.
¹⁸⁶ 怠惰像の不明瞭さについては、以下参照。*Thomson (1986), p.167.
¹⁸⁷ 18世紀、特定の社会階層やジェンダーが怠惰と結びつけられたことについては 以下参照。Jordan (2014).
 サミュエル・ジョンソンが『アイドラー』の創刊号で、人を「怠ける動物」としたうえで、「怠けることは悪徳」と書き、また、ウィリアム・ホガースが《勤勉と怠惰》で描いたように、怠惰の悪徳は克服すべきものに他ならない。怠惰の悪徳が蔓延る城は、ジョンソンがいうところの、幻想を追って山を登らない者が逸楽を味わう「怠惰の谷間」そのものである。以下参照。泉谷 (1983) 65-69 頁。鈴木 (1984) 432 頁。ホガースが『怠惰の城』の出版前の内容を共有していた可能性と、『怠惰の城』及び18世紀前半の怠惰を扱った詩とホガースとの関係については、以下参照。*Paulson (1991-93), III, pp.83-84. Paulson (1975), pp.73-75.
 『怠惰の城』の開かれた公共性は、スペンサーの『妖精の女王』において、活動的な生活と対比される楽しみに溢れた閑暇が、究極的には破滅に行きつくと言われていることとの違いであろう。以下参照。Fludernik &

Nandi, ed. (2014), pp.9-10. なお、トムソン自身が所有していた『妖精の女王』は、1715年のジョン・ヒューズによる『スペンサー著作集』である。以下参照。#Munby, ed. (1971), I, p.57, no.83.

さらに、このトムソンの公共性は、18世紀後半以降に孤独な黙想が勤勉な労働と結びつけられるという事実 [Adelman (2011) を参照] を先取りしているとも言える。

¹⁸⁸ トムソンからワーズワス、コルリッジ、キーツらへと至る怠惰の系譜については、以下参照。菊池 (1974) 42-43 頁。

¹⁹⁰ Adelman (2014), pp.181-92. *McKillop (1961), pp.60-67. ジェラードもロマン派による『怠惰の城』の受容は、この詩の描写的側面に向けられ、寓意的な意味には注意が払われていなかった点を指摘する。*Gerrard (1990), p.45.

一方で、怠惰の積極的な受容が、19世紀後半を通じて解体していくことについては、以下参照。Adelman (2018).

¹⁹¹ *Keats (1952), p.102. キーツとトムソンの関係については、以下参照。Hayter (1968), pp.306-08. *Spiegelman (1995), pp.87-90.

¹⁹² *Keats (1952), p.314.

¹⁹³ *Keats (1952), p.314.

¹⁹⁴ *Keats (1952), p.102.

¹⁹⁵ Keats (1970), p.543.

¹⁹⁶ 井浦 (2012) 61-63 頁。

¹⁹⁷ *Keats (1952), pp.124-25.

¹⁹⁸ この作品に描かれるプシケの姿は、『黄金の驢馬』の挿絵との関係も指摘される。以下参照。*Röthlisberger (1961), I, p.385.

¹⁹⁹ Keats (1970), p.516. キーツ (2005) 128-29 頁。

²⁰⁰ Keats (1970), pp.519-21. キーツ (2005) 134-35 頁。

²⁰¹ 本作品にはイェール英国美術センター所蔵の別バージョンも存在する。以下参照。Myrone, ed. (2011), No.12, p.76.

²⁰² *Sambrook (1992), p.1409.

引用文献

- 井浦葉子 (2012) : 「John Keats の詩想 : "Ode on Melancholy" と "Ode on Indolence" を中心に」『西南学院大学大学院文学研究論集』31, 41-67 頁。
- 出羽尚 (2016) : 「トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜 (1)」『宇都宮大学国際学部研究論集』41号, 1-16 頁。
- 出羽尚 (2018) : 「トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜 (3)」『宇都宮大学国際学部研究論集』46号, 1-8 頁。
- 出羽尚 (2021) : 「トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜 (4)」『宇都宮大学国際学部研究論集』51号, 1-13 頁。
- 泉谷寛 (1983) : 「ジョンソンにおける「怠惰」の問題—「アイドラー」の中の怠けものたち—」

- 『四国学院大学論集』 55, 63-83 頁.
- ジョン・キーツ (2005): 『対訳キーツ詩集』 宮崎雄行編, 東京, 岩波書店.
- 鈴木善三 (1984): 「ジョンソンにおける怠惰」『英語青年』 130 巻, 9 号, 432-33 頁.
- 菊池亘 (1974): 「キーツにおける 'indolence' という語」『言語文化』 10, 33-47 頁.
- Adelman, Richard (2011): *Idleness, Contemplation and the Aesthetic, 1750-1830*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Adelman, Richard (2014): 'Idleness and Creativity: Poetic Disquisitions on Idleness in the Eighteenth and Early Nineteenth Centuries' in Minika Fludernik & Miriam Nandi, ed., *Idleness, Indolence and Leisure in English Literature*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, pp.174-94.
- Adelman, Richard (2018): *Idleness and Aesthetic Consciousness, 1815-1900*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Bradley, Richard (1739): *The New Improvements of Planting and Gardening, both Philosophical and Practical*, 7th ed., London, A. Battersworth, et al.
- Chase, Isabel Wakelin Urban (1943): *Horace Walpole: Gardenist*, Princeton, Princeton University Press.
- Fludernik, Minika & Miriam Nandi, ed. (2014): *Idleness, Indolence and Leisure in English Literature*, Basingstoke, Palgrave Macmillan.
- Hayter, Alethea (1968): *Opium and the Romantic Imagination*, London, Faber and Faber.
- Jordan, Sarah (2014): 'Idleness, Class and Gender in the Long Eighteenth Century', in Minika Fludernik & Miriam Nandi, ed., *Idleness, Indolence and Leisure in English Literature*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, pp.107-28.
- Keats, John (1970): *Keats the Complete Poems*, ed. by Miriam Allott, London, Longman.
- Loudon, J. C. (1835): *An Encyclopaedia of Gardening*, new ed., London, Longman, Rees, Orme, Brown, Green, and Longman.
- Myron, Martin, ed. (2011): *John Martin: Apocalypse*, London, Tate Publishing.
- Paulson, Ronald (1975): *Emblem and Expression: Meaning in English Art of the Eighteenth Century*, Cambridge, Harvard University Press.
- Urban, Sylvanus (1801): 'Inscriptions at Hagley', *Gentleman's Magazine*, LXXI, July, p.593.
- Warton, Joseph (1782): *An Essay on the Genius and Writings of Pope*, London, J. Dodsley, 2vols.
- Whately, Thomas (1770): *Observations on Modern Gardening, Illustrated by Descriptions*, London, T. Payne.
- Whately, Thomas (1801): *Observations on Modern Gardening, and Laying out Pleasure-Grounds, Parks, Farms, Ridings &c. Illustrated by Descriptions*, new ed., London, West and Hughes.

***The Castle of Indolence* by James Thomson and the Ideas of Indolence (5)**

IZUHA Takashi

Abstract

Considering the analogy between the eighteenth-century English landscape gardens and the castle of indolence in terms that both are recognized as sources of imagination and creativity, Thomson's idea of indolence has its importance in the sense that indolence can be accepted positively as the source of creating arts like poems. As Sambrook mentions, Thomson thought that a cause for poets was to serve the cause of public virtue instead of being a self-indulgent, self-absorbed dreamer. To make the castle publicly good enough for all comers to be able to culture their imagination, Thomson describes this castle as a place of poetical associations in analogy with the contemporary landscape gardens and the classical mount Parnassus. This imaginative and poetical castle of indolence is what romantic poets were inspired by in the early nineteenth century. The influence upon the later romanticists shows that Thomson the poet served the cause of public virtue with his poetical contributions to inspire the next generations.

(2021年6月1日受理)